

マリオ・マレガの執筆活動とその「文脈」

シルヴィオ・ヴィータ

はじめに —マレガ文書群が語るもう一つの歴史—

マリオ・マレガ神父が集めた豊後国などの近世文書がバチカン図書館に渡った経緯について、徐々にその背景が明らかになってきた。しかし、このような史料のコレクションは多様な構成要素を有しており、それぞれの成立段階を解明する作業によって、異なった歴史像を引き出すことができる。たとえば近世の村社会の姿、藩の行政機構の働き、近代まで行政文書を守り続ける藩主家のあり方など、細かく分析すればするほど、複数の「断層」がみえてくる。別の論考において指摘したように、その「断層」の一つに20世紀という時代がある。そこには、マレガ自身の研究への取り組み方、理念およびある種の「思想」や、彼が生きた時代の課題も集約されているとみてよい。

物理的なレベルでは、文書群のなかのノートや書き込み、付箋として使われた領収書や給料明細、講演会のチラシや本人に宛てた手紙の封筒などが、マレガ個人の行動範囲を反映する。さらに、包装に使った新聞紙からは、昭和戦前期、1930年代から40年代の世界および日本各地や当時の大分の地域社会の姿も垣間見える。豊後キリシタンの記憶をたどる試みは、これらの資料を糸口とすることで、より広い視野で捉えることができる。本稿ではとくに、聖職者としての史料収集活動やそれに基づいた歴史研究、なかでもキリシタン研究と日本文化研究が当時の社会でどのような意味を持っていたかを問いたい。この立場からマレガの業績を分析し、20世紀前半のコンテクストに位置付けるには、大きく三つの文脈に分けて見る必要がある。まず一つめがバチカンとの繋がりであり、マレガの活動は宣教師として「国際的に」どのような流れを汲むのか

を考えなければならない。

しかし、マレガの仕事を考察していくと、日本国内においてこれとは別に二つのローカルな文脈も注目に値する。大分地元社会の郷土研究の枠組みのなかで、彼を取り巻く在野の研究者との関係と、豊後キリシタン史料の発掘を、昭和時代のキリシタン研究のなかでどのように読むのかというものである。なかでも、大分におけるマレガの活躍については、キリシタン遺跡の調査という観点からすでに詳細な研究発表もなされており、有益な指摘が多く、地元での文脈を考えるに当たってよいベースとなっている²⁾。そのようなこともあり、本稿では最初の文脈に着目して分析を加え、背景全体を解明できるようにしたい。

1. マレガ「博士」の誕生 —サレジオ会における研究者像—

司牧的な仕事のかたわら歴史研究の道を歩んだことは、マレガ神父に限った話ではない。伝道者の一つの形態として、同時代の他のカトリック司祭にも見られ、教会側はこのような活動を任務の領域内として認めていた。その流れのなかで、はじめにサレジオ会においてマレガの研究がどのように受け止められたかを考える意味がある。そもそも、日本サレジオ会の管区長を長年務めたヴァンチェンツォ・チマッティ神父からの指示で、マレガは歴史研究に取り組んだのだが、研究そのものが有意義であっただけでなく、布教地の社会と繋がる手立てとして有効であるとされていた。この発想はまず、1949（昭和24）年に管区長の地位から退いたチマッティが、日本におけるサレジオ会のあゆみを、同会の来日25周年（1926～51）記念で編集した報告書のなかに見られる。この資料は『日本におけるサレジオ会の業績 —最初の25年略史—』（*Breve cronistoria dei primi 25 anni di lavoro salesiano in Giappone*）という題で、管轄地である日本の地理、歴史、民族を概観し、チマッティらしい緻密さで司牧活動の諸相を伝えている。日本各地のサレジオ会拠点の形成と特徴、会員が携わった事業についての記述や、布教の方法、さらに教育施設や会による出版事業の歴史などが取り上げられ、布教活動の成果をとところどころ見やすく表にまとめている⁴⁾。掲載データ（教会や施設、宣教師、各地域の信者、出版物などの数）は、

管区の行政文書に基づいて集計されたものであるという。これは、当時の日本サレジオ会の仕事の総まとめとして信憑性の高いものであり、このなかですでにマレガの研究は、会の（日本）社会に対する貢献の一例として高く評価されている⁵⁾。

上記の報告書は内部資料の性格を持っているが、編集後2年を経て、1953年にほぼ同じ内容を啓蒙的な読み物風にアレンジしたものが、イタリアのサレジオ会本部から刊行されている。それには、『日出ずる国の帝国にて』(Nell'impero del Sol Levante) という一般読者向けのタイトルが付く⁶⁾。この書物は、以前の報告書で割愛された部分を補うため、「サレジオ会宣教師による文化面での貢献」という章を設けて、会員のいわゆる「社会貢献」をより明確に紹介したものである。マレガとの関連でとくに注目すべきことは、その冒頭のチマッティの指摘である。

サレジオ会の宣教師は、改心を促す直接の仕事のほか、自分に託された民衆に対して使徒的な伝道をまっとうするための有用なる手段として、才能や個人的な技量を生かすように試みた。とくに宗教、文学、歴史、科学、美術の分野である。日本民族というものは、文化的なものとして紹介される事柄をより好んだり、評価したり、そのようなものに関わる才能に恵まれた人を尊敬するからである⁷⁾。

そして、この章のなかで、歴史研究の分野を代表する人物としてマレガが登場する。他のすべての聖職者と違い、彼の名前にだけ「司祭」の肩書きに「博士」という称号が加えられている。マレガの研究成果に概略的に触れ、布教地大分の古い記録およびキリシタンゆかりの地や遺跡について探求を続けてきたとある⁸⁾。さらに、『古事記』など訳書の三部作ともいえるものも取り上げ、これらの業績によってマレガは、本国イタリアで日本の知識を広めることに成功していると強調する。また、仏教經典の翻訳、密教儀礼、仏教研究などに関する未発表の原稿も数多いとの指摘も見られる。マレガだけ「博士」として紹介されているのは実に興味深い⁹⁾が、その言葉に研究者としてのアイデンティティが潜んでいるように思われる。そして、このことは本人も自覚していたようである。よく見ると、マレガ自身の著作のなかでも「博士」という称号がところ

どころで使われている。イタリア語訳『古事記』などの表紙には「大分在日カトリック布教団のマリオ・マレガ博士による日本語原文の初訳」(“Prima versione italiana dall'originale giapponese del Dott. Mario Marega della missione cattolica Oita, Giappone”)と記載されており、戦前に同じイタリア語訳『古事記』の業績を大々的に取り上げた『朝日新聞』でも、「大分教会主任司祭神学博士¹¹⁾」として人物紹介している。

サレジオ会員来日の25周年に当たる1950年頃、上記のようにマレガには一種の定評があったようである。考えてみれば、その時期はまさに人生や研究活動の節目であり、そこからマレガにとって個人的な意味での戦後が始まったといっても過言ではない。1949年にチマッティが管区長から一歩退いただけでなく、同年、1933年以来昭和前期の日本でカトリック教会を導いてきた駐日教皇庁代表パオロ・マレツァ(Paolo Marella, 1895-1984)も日本を離れた¹²⁾。その後任、マクシミリアン・ド・フルステンベルグ(Maximilien de Furstenberg, 1904-88)大司教の在職期間中に、現在バチカン図書館所蔵のマレガ文書群はローマに送られることになった。そして、マレガ自身も1950年1月東京に呼び戻され、ひとまず豊後キリシタン史料に取り組むことに終止符を打ったようである。チマッティによると、彼はイタリアへの一時帰国の後、1948年に未完であった研究を「最後まで行く」名目で大分に戻った¹³⁾。目的は文書の「研究」であり、それらはまだ現地に保存されていたであろうし、研究を成し遂げるために必要とした人々とのネットワークも存続していたとみてよい。反対に、両方の条件が満たされない東京では研究が続けられないという解釈も妥当であろう。このような憶測を裏付けるためには、1950年以降のマレガ自身の気持ちを確かめるべく、1952年の書簡を参照すればわかる。実際、書簡には、再び大分に移ることが許されるならば、豊後キリシタン史料集の3巻目をまとめた¹⁴⁾という趣旨のことが述べられている。だが、それは許されなかった¹⁵⁾ので、その時点で文書も東京へ移されたはずである。そうであれば、最終的に研究を続ける計画を断念し、マレガが教皇庁大使館を介してバチカン図書館に文書が渡るように取り決めたという流れがうかがえる。

2. マリオ・マレガの学問体系 ―蔵書印に見られる業績の分類から―

以上のような経過から、サレジオ会25周年の時期をマレガの生涯の節目とみても差し支えないだろう。同様に、彼の研究活動を概観しても、1950年代までの期間が大きな意味を持つ。そこで、その研究の範囲は具体的にどのようなものであったかがつぎの課題となる。末尾の著作リストをこの時代の枠組みを中心に整理するには、マレガ自身の見解は非常に参考になる。彼がすでに自分の興味範囲について考察を試み、その分類は上記のチマッティ神父の文章にも現れるように、サレジオ会側の見方ともうまく一致している。現在ローマ、サレジオ大学図書館が所蔵する、手元に置いていたとされる一冊の伊訳『古事記』には興味深い蔵書印が押されている。中央部分に弓を射る人間の姿がデザインされており、弓道家のマレガを表していると思われる。さらに、その上部に左から「豊後切支丹」、「忠臣蔵」、「能楽」、「般若」、「古事記」と5つの言葉が並び、明らかに本人が自覚している研究分野、もしくは自分が著したもののカテゴリーを指している。このようなカテゴリーによっても、マレガの「学問体系」を突き止めることができるといえよう。

第一に、チマッティがいう「布教地の歴史」の一例として、戦時中から終戦直後にかけて刊行された『豊後切支丹史料』正・続編¹⁸⁾があげられる。蔵書印に見られる最初のカテゴリーの命名はこの書物のタイトルと関係している。『豊後切支丹史料』はマレガの史料探しの成果としてもっとも知られているが、彼はほかにも翻刻・注解を中心に、そのような一次史料に基づいた研究を国内外に発表している。たとえば、『豊後切支丹史料』の刊行と近い時期、歴史地理研究会の機関誌『歴史地理』には1942年と1943年の2回、マレガの短い報告が掲載されている。前者は四代目臼杵藩主稲葉信通が江戸切支丹奉行（宗門改役を指す）に宛てた報告に関わるものであり、そこで筆者のマレガが、「私は所持しているので、歴史研究家の参考にもと茲にそれを発表する事とした」（原文のまま）と主張する。あと一つの論考には、臼杵藩の藩政資料数点を翻刻、解説しているが、そのような言及はまったくみられない。しかし、これも自身

で所持していた可能性が高い。両方に、まもなく刊行する、もしくは刊行したところの『豊後切支丹史料』が、筆者の業績として取り上げられている。また、それより早い時期に、キリシタン時代の研究との関連で1937年発行の『大分史談』1号にもマレガの名前が確認できる。これは『歴史地理』の場合と違い、自ら集めた史料を紹介するものではない。その上、2ページ程度の短文は編集者の手施しがなく、学術的な内容というよりも、地元の郷土史活動の始まりにおいて、それに関わった人たちとマレガが協力関係にあったという証に過ぎない²¹⁾。ちなみに、地元研究者との繋がりは大分を離れてからも途絶えず、豊後史料についてのマレガの知識は評価され続けたようである。そして、このことがあったからこそ後年に『大分県地方史』にも二つの文章を寄せている。「豊後大分郡津守村の五人組手形」²²⁾は50年代の作となるが、その後晩年に当たる時期には、同誌の大分県（豊後・豊前）キリシタン特輯号を編集する際、「大分県大野郡緒方町字馬背畑の珍しい二重の洞窟について」というエッセイを載せており²³⁾、マレガの知識が現地でも頼られていたことがわかる。とくに後者は、彼のもう一つの関心事、キリシタン遺跡について物語っている。実際に、大分の新聞に墓などのキリシタン遺跡の「発見者」としてたびたび登場しているように、マレガは文献研究以外にも、地域のキリシタン遺物調査の先駆者の一人とみなされていた²⁴⁾。ただ、この原稿は学術的内容が極めて薄く、キリシタンゆかりの遺跡から近世初期における在日イタリア人宣教師の殉教を讃えるのみである。

このように、マレガ神父の名前は、豊後キリシタンの研究者として、1930年代から日本国内で注目されるようになった。しかし、彼は入手していたキリシタン史料を別の方面でも活用させている。これは、日本からバチカンへ発信する動きとして、布教地の歴史・民族研究といった枠組みにおいてである。早くも1939年、新設の布教・民族博物館の学術機関誌、『ラテラノ宮殿年報』(Annali Lateranensi)の3号に、新出史料を紹介しながら大分地方における布教の前史について論じている。マレガはここでまず自らが白桦藩関係文書を発見したと報告し、キリシタン弾圧のエビデンスとして禁教の高札の写真や複数例の所在について言及すると同時に、大分市立図書館に残るキリシタン関係の資料も取り上げている。さらに、自分自身も関わっていた考古学調査に触れ、

豊後キリシタンの跡をたどるさいの古い墓地の重要性を主張した。その時点で500基ほどのキリシタン墓が特定されたという²⁶⁾。所持の文書は殉教の記録でもあると考え、解読可能なものが少ないと悲観的に判断しながらも、最後に、読めたものについては必ずローマに報告を送ると明言して締めている²⁷⁾。これに続き、戦後になってからも、同誌に弾圧の原点となる慶長禁教令および関係資料の本文と訳を寄せ、日本におけるキリシタン弾圧の歴史的事情を理解できるよう詳細な解説も加えた²⁸⁾。禁教令の写しは、マレガコレクションの一点(323号と明記)であり、布教・民族博物館に寄贈したと記している。これは『東照神君拾五箇条』の一例であり、マレガによれば中津地域から新出したものということになる。訳文の注には、他にも所持文書を加え、ローマ字翻刻とイタリア語訳をもって解説している。

『ラテラノ宮殿年報』はマレガの研究成果を公開するには自然の受け皿だったと思われる。1927年末以来ラテラノ宮殿には布教・民族博物館が置かれ、これは1925年に開かれたバチカン布教博覧会 (Esposizione Missionaria Vaticana) が常設展となったものである。機関誌の名前の由来も博物館の所在と関係している。後述するように、博覧会にはカトリック教界およびその布教活動は異文化理解に貢献できるという趣旨がそこにあったが、それに沿って、布教の歴史だけではなく、マレガが書いた土着の宗教文化を分析する論考も、早くから掲載された。1949年の真言密教の儀礼を概説的に紹介する100ページ近くの論文がまずそれに当たる。それは蔵書印に記された「般若」、すなわち仏教研究に関する数少ない原稿の一例であるが、この分野の論考や訳文は、チマッティという未発表原稿として現在サレジオ大学図書館に何点か所蔵されている。『ラテラノ宮殿年報』に寄せた最後の原稿も、部分的にそのなかに位置づけることができるかもしれない。独特のイタリア語ローマ字表記による Oci-bo-sciu (「落穂集」か) という題名で、1961年に発表されたものであるが、その名の通り雑多なものを集めている。こちらも長文であり、決して読みやすいものとはいえない。内容は徳川綱吉、吉宗の法令、奈良時代の仏教、秦氏のこと、江戸期の禁教に関する用語の解説など多方面にわたり、筋としては曖昧で、論点もつかみにくい。おそらく長年取り組んできた研究課題について、思うままに伝え

ているだけなのだろう。また、調布市のチマッティ資料館にはマレガが持っていたこの論文の抜き刷りが残っている。自筆の書き込みや訂正の痕跡があり、ローマでの編集作業を辛辣な表現で批判している。いずれにしても、このような一連の『ラテラノ宮殿年報』掲載の論考は、上記の蔵書印にあるいくつかのジャンルにまたがっており、ラテラノ宮殿つまりバチカン布教・民族博物館はマレガの研究活動の重要な発信先の一つとして注目に値する。

一方、もう一つの流れは「古事記」、「能楽」、「忠臣蔵」として表れる。これはチマッティ神父が指摘する、日本文化の知識を広める行為と直接に関係する。1938年刊の『古事記』のイタリア語訳は³¹⁾欧文訳『古事記』の歴史のなかで比較的高い位置をしめている。出版元のラテルツァ社は、哲学者ベネデット・クローチェ (Benedetto Croce, 1866-1952) を中心に、歴史、哲学関連などの書籍を主として世に出し、さらにヨーロッパ内外の「精神書」を20世紀前半のイタリアの教養階級に提供した。マレガ「博士」の『古事記』は文化外交の動きに乗った感があり、出版社にアプローチするため駐伊日本大使館に働きかけたことが、マレガの書簡からもわかる。³²⁾序文には日本の聖書であるという定義をくだし、日露戦争以後ヨーロッパで讃えられた日本精神が理解できるものとして紹介されている。同様の立場は終戦間もなく同社によって出版された『仮名手本忠臣蔵』のイタリア語訳に通じる。³³⁾また伊訳『古事記』が出た翌年には、民話、伝説、昔話そして自身による日本の印象記を含んだ『伝説と物語に見る日本』を、同じくラテルツァ社から上梓した。³⁴⁾日本趣味をそそるような紹介の仕方で、伊訳『古事記』と同様、イタリア教養層の一般読者に訴えかけている。その傍ら、「能楽」は、初期『モニュメンタ・ニッポニカ』に1939～1941年の間に寄稿した『阿漕』、『翁』、『水無瀬』三本の謡曲のイタリア語訳をいうが、³⁵⁾忠臣蔵と同様にマレガが演劇について特別な関心を抱いていたことを示す。

先述のように、蔵書印にある研究分野は「マレガ博士」の仕事をまとめたものであるが、実はマレガの執筆活動のすべてではない。それ以外にも「マレガ神父」としての布教活動に関わる著作がある。これらは、いわばカトリック司祭としての立場を表すものであり、マレガの場合、その立場もどのように学術研究に関係していたかが問われる。機会を得て考察すべき課題であり、とくに

数ある昭和時代のカトリック文献のなかで、マレガの著書にはどのような特徴があるのかをみななければならないが、ここでは、簡単に紹介するにとどめる。まず、これらの著書は例外なく日本における初期サレジオ会の出版活動の一環として行われた。ドン・ボスコ社の「カトリック講話集」はその時期の代表的な叢書として知られ、マレガはその企画に深く関わっている。この叢書の名前も、会の創立者である著名なドン・ボスコの19世紀イタリアの啓蒙活動に繋がっており、その当時表したシリーズのタイトル、Letture Cattolicheの日本語訳として理解してよいだろう。表紙のデザインもマレガの手によるようである。早い時期にこのことを家族に伝え、表紙のサンプルまで実家に送っている。これは現在ゴリツィア市の中央神学院図書館蔵のマレガ関係資料に含められている。そして、歴史研究に入ろうとする早い時期に、『信仰の根本』(1933年)³⁶⁾、『カトリックは答へる』1(1933年)と同2(1934年)³⁷⁾、『日本の思想とカトリックの思想』(1934年)³⁸⁾を集中的に著している。なかでも、『カトリックは答へる』はまさしく時代の精神に「答えた」ものであるといえる。カトリック信仰は、日本の思想、伝統習慣、文化風土に反するものではなく、当時の国家の概念にも矛盾しないと主張している。また、『日本の思想とカトリックの思想』も注目すべきテーマを提供するもので、マレガにとって『古事記』の研究はどのような意味を持ったかを説明している。そこでは、日本の古代神話もキリスト教的な読み方が可能であると述べており、つまり日本の研究と布教は調和したものであるという弁明の書としても取れる。ここには、根底に流れるマレガの「思想」のようなものがうかがえ、詳しい分析が必要だろう。上記の「学問体系」を理解する鍵として不可欠だと思われる。

3. 1925年のバチカン布教博覧会が意味するもの

宣教師という立場を視野に入れ、マレガによる多方面の歴史・文化研究はサレジオ会のなかでどのような意味が与えられたかが明らかになったが、より広い「文脈」を探ると、興味深い流れもみえてくる。すなわち、マレガの成果とカトリック教界本部、バチカン指導部との関わりを「文脈」として捉え、当時

の布教に関する共通意識に焦点を当ててみたい。これは、マレガが行った活動を理解するにあたり、一つの糸口となるだろう。その共通意識を形成する重要なステップとして、1920年代、ピウス11世在位中、布教活動の在り方を象徴するバチカン布教博覧会が前代未聞の規模で企画されたことが挙げられる。この博覧会を起点にして、布教と歴史学、布教と民俗学・人類学、つまり宣教と宣教地文化の関連を総合的にまとめることが一種の風潮となっていった。博覧会は1925（大正14）年1月から1年を通して開催されたが、1925年は聖年にあたり、それを祝すための中心行事の一つでもあった。聖年ということで、イタリア半島をはじめ世界各地からの巡礼者がローマに集まる機会ともなり、そのなかには、まだ叙階までもいかない23歳の若き神学生マレガもいた。時代の精神を共有するという意味では些細なことだとしても、おそらくマレガ自身も布教博覧会を見たであろう事実は、上記の点からいえば、実に有意義なものである。実際、その事実を伝えてくれる伝記資料が、最近バチカン図書館所蔵マレガ文書のなかから見つかった。これは、日本の絵巻物の形をとった自伝のようなものであり、昭和時代の外国人神父が記した「絵伝」として類例のない資料である。⁴⁰⁾1945年夏、大分大空襲の後、九州地方に滞在していたすべての外国人宣教師とともに熊本県南阿蘇村の栃木温泉に収容された際、それまでの人生を振り返って、まるで現代の漫画のように自身の半生の主要なエピソードを綴ったものである。ユーモラスな一コマとして、「1925年 ローマ」というキャプションの下に、街のうえに聳え立つ巨大なマレガの姿が描かれ、古代の遺跡およびバチカンをはじめ聖年に賑わうカトリック教会の風景を見渡している。このことから想像してみても、人格ないし自身の思想形成において、それが大切な経験であったとみて間違いなだろう。

布教博覧会はバチカン庭園および「松笠の中庭」(Cortile della pigna) を会場に盛況を呈したが、1925年の開催期間を終えた後も、展示品の一部はバチカン布教・民族博物館の常設展となり現在に至っている。博覧会から博物館への推移過程を追っていくと、上記の共通認識やそれに関わる言説について貴重な情報が得られる。博覧会の意義は近年研究者の注目を浴びるようになったため、⁴¹⁾複数の論考を通して全体の輪郭が明確になってきた。その研究にも利用されて

いる資料のなかで、宣伝効果を狙い数か国語で同時発行された画報雑誌は、博覧会の構想を考えるのに役立つ。イタリア語版ではRivista illustrata dell'esposizione missionaria vaticana (『バチカン布教博覧会画報』)というタイトルで、2週間に1号のペースで合計26回発行された。博覧会がかなり早い段階から一時的なイベントとして終わらない傾向をみせていることが、この雑誌を見ても明らかである。1925年末に博覧会がひとまず終了したあとも、画報は翌年1926年にも2か月ごとに付録 (Supplementi) 版として継続し、6回刊行された。1925年発行のものは随時ニュースも盛り込んでいるのに対し、この付録版は博覧会の各部門についての解説という形をとっている。世界の地域、修道会ごとの布教活動など、諸国の様子を生き生きと伝える博覧会の保存版といった印象が強い。このような資料は、宣伝の手段という性質上散逸しやすいものであり、現在バチカン図書館以外にこれら全点を見ることは難しい。いずれにしても、展覧会終了後、1927年にバチカン布教・民族博物館が開かれるまでその内容は語り続けられ、繋ぎとして機能したことは間違いないだろう。その第1号によると、1925年1年間の入場者の数は100万人にのぼった⁴²⁾という。これは聖年にローマを訪れた巡礼者の数と一致するが、多少の誇張があったにしても、聖年祝祭の中心企画としての存在感は十分にある。

展示スペースはテーマごと、地域ごとに分けられ、たとえば「テーマ館」の一つとして、まず「歴史の館」があげられる。布教の歴史を通観できるようになっており、そこには西安の『大秦景教流行中国碑』のレプリカなどが展示⁴³⁾されていたらしい。これは「殉教者の館」⁴⁴⁾と合わせて、布教の歴史を振り返るのに非常に重要なものだったのであろう。また「民族の館」は、それぞれの地域の文化を紹介する目的で作られた。まさしく宣教活動の二本柱でもあるかのよう⁴⁵⁾に、ここでも布教の歴史と諸地域の民族についての知識が強調されている。地理的に分けられたセクションでは、日本関係のコーナーもあり、こちらは少し遅れて入館可能となったが、細かくいえば、日本、フィリピン、オセアニア館であった。日本関連の企画は、教皇グレゴリウス16世の取り計らいで、1831年より長期にわたり独占的に日本布教に取り組んだパリ外国宣教会に委託された。『バチカン布教博覧会画報』の付録シリーズ3号では日本カトリック教界

の現状を紹介し、そのなかの新しい動きとして、サレジオ会の日本入りが決まったということにも触れている⁴⁶⁾。このことは、1926年の時点では最新の情報であった。画報の最終号である1925年12月31日発行の第26号には、サレジオ会による布教事業と担当地域に関する概説が掲載されているが、日本のことはまだ視野に入っていなかった⁴⁷⁾。残念ながら日本関係展示の詳細については、これらの資料からは何もわからず、今後の資料調査を待つしかない⁴⁸⁾。おそらくバチカン布教・民族博物館に残っている関係文書に当たれば、サレジオ会が日本に入る直前のカトリック世界における日本のイメージがうかがえるだろう。この問題はひとまず保留にするしかないが、上記の画報によれば、日本政府からも展示品や写真などが送られたとあり、ある程度の協力があつたことがわかる。内容について唯一わかっていることは、17世紀はじめにウィリアム・アダムスらが乗っていたリーフデ号に設置されていたという、有名なエラスムスの木像の写真が提供されたことである。このことは日欧交渉史においては重要なエピソードだが、プロテスタントの進出を意味するものを、カトリックを讃える企画に送ったのは、いささかの違和感が残る⁴⁹⁾。

以上のことを全体像として念頭におき、マレガの活動の背景について考えるならば、博覧会の趣旨は注目に値する。そこに新しい布教観が読み取れるからである。画報の第1号では、開会に臨み、宣教師たちは民俗学、言語学、自然科学、地理学などの専門知識を身につけたものである以上に、「世界の学問的資産の増幅に貢献する」ということが主張されている⁵⁰⁾。それは布教の付加価値のようなものとみなされ、学術的貢献として位置付けられている。なお、ピウス11世は「宣教の教皇」と呼ばれ、以上のような動きのすべての原動力であった。バチカン図書館長を務めた経験もあり、近代学問と宗教の関係を新しい視点から整理し、宣教師はキリストの教えを広めることはもとより、近代社会では未開の地域に文明をもたらす役割をも備えているということ、それらは学術的にも近代的学問に与するものだと考えた⁵¹⁾。この枠組みのなかで、企画全体の学術委員会の構成をとってみても、布教の歴史と民俗・文化研究が二つの重要な領域とされていたことがみえてくる。それぞれの責任者として、同世代のピエトロ・タッキ・ヴェントゥーリ (Pietro Tacchi Venturi, 1861-1956) とヴィ

ルヘルム・シュミット（Wilhelm Schmidt、1868-1954）がおり、カトリックの学問を代表している。イエズス会のタッキ・ヴェントゥーリは中国布教史の研究で名を成し、外交的にも教皇庁の信頼を得ており⁵²⁾、一方のシュミットは、民族学ウィーン学派の中心人物として知られているが、博覧会の企画においてとくに評価された。人類の歴史や文化圏について、彼の説はカトリックの近代的学問の創立者ともいべき権威あるものであった⁵³⁾。また、布教・民族博物館の初代館長ともなった。マレガが寄稿した『ラテラノ宮殿年報』は、シュミットが館長在任中に発案された学術機関誌である。タッキ・ヴェントゥーリとシュミットが代表する研究分野は、まさしくマレガが探ったものと見事に一致する。このことを考えても、マレガの活動は個人的な領域を超え、バチカンの動きに込んでいるといえる。

本論のはじめに設定したマレガの活動の「文脈」のなかで、彼が研究成果の発信先としてバチカンを視野に入れていることは、いくつもの事柄に見て取れる。1930年代以降、『ラテラノ宮殿年報』に論考を発表したことは別としても、世界の布教地で得られた知識をローマに届けるといふ博覧会の立場から、『カトリック新聞』でも伝えられたように、『古事記』のイタリア語訳を正式にピウス11世に献上したことと⁵⁴⁾、ほかに、戦前から数回にわたり豊後キリシタンの記録を布教・民族博物館に寄贈していること、最終的に文書コレクションをバチカン図書館に送っていることも、この流れに沿った行為であり、「文脈」のマレガの意識を証明している。さらに、もう一つは、すでに指摘されているように、展覧会はカトリック教会の「力」を誇示する機会でもあった⁵⁵⁾。そして、それは後に続いた数々の宣教展にも受け継がれる。1929年のバルセロナ布教博覧会をはじめ一つの流れともなった。サレジオ会も例に漏れず、ローマの博覧会の延長線であるかのように、翌年1926年に本部トリノで会の活動に限った布教展を開催している⁵⁶⁾。教会の「力」で、管轄地域に知的に根付いた宣教師のネットワークを活かして、そこからその文化・歴史を解き明かすために「もの」が集められる。そして、またそれらを展示するという回路である。コレクターの役割もそこから生まれた。それが、マレガのもう一つの側面でもある。

彼自身は文書などを収集して、歴史研究の史料およびそれに基づいた成果を

発表しただけでなく、展示品になるような「もの」も集めている。このような意識は常時マレガのなかにあったとみてよい。たとえば、戦後、イタリアへ一時帰国した際、シチリアのパレルモ市で行われた布教展に日本関係の展示品をサレジオ会が提供し、マレガ自身も講演したことが、同会内部の資料からわかっている⁵⁷⁾。そして、トリノ本部にも、博物館で展示するよう定期的に「もの」を送り続けた⁵⁸⁾。さらにもう一つ、現在サレジオ大学図書館所蔵のマレガ文庫を見てみると、江戸・明治の版本は挿絵のあるものを中心に収集されたことがわかる。資料としての書物よりも、展示できる「もの」としての書物を意図的に集めていたのだらう⁵⁹⁾。コレクターとしてのマレガを理解するには、そこに重要な鍵があると考えている。

むすびにかえて

以上のように、時代の一側面から宣教師としてのマレガのあり方を分析してみた。繰り返しになるが、彼の活動の全体像を考察するには課題が残る。マレガが敏感に反応した「文脈」がまた二つある。大分社会の郷土研究、地方研究やそれに関わった在野の研究者がその一つであり、また、同時代の日本国内におけるキリシタン研究の系譜もマレガにとって刺激的な「文脈」であった。この二つの枠組みのなかでもマレガの研究活動を考えることはできるが、本論で紹介したような教皇庁およびサレジオ会内の位置づけと共通意識が、重要な背景として人物研究の発端となるであろう。

マリオ・マレガ著作リスト

単行本

1932

『豊臣秀吉と切支丹大名』大分 ドン・ボスコ社 1932 (カトリック講話集 12)

1933

『信仰の根本』大分 ドン・ボスコ社 1933 (カトリック講話集 25)

『カトリックは答へる』1 大分 ドン・ボスコ社 1933 (カトリック講話集 28-29)

1934

『カトリックは答へる』2 大分 ドン・ボスコ社 1934 (カトリック講話集 36)
『ラテン文法』上巻 (単語の形態学) 大分 ドン・ボスコ社 1934
『日本の思想とカトリックの思想』大分 ドン・ボスコ社 1934

1938

Ko-gi-ki, vecchie cose scritte: libro base dello shintoismo giapponese. Bari: Laterza, 1938.

1939

Il Giappone nei racconti e nelle leggende. Bari: Laterza, 1939.

1942

『豊後切支丹史料』別府 サレジオ会 1942

1946

『続豊後切支丹史料』東京 ドン・ボスコ社 1946

1948

Il Ciuscingura, la vendetta dei 47 ronin: studio sui testi originali giapponesi. Bari: Laterza, 1948.

1968

『キリシタンの英雄たち』東京 ドン・ボスコ社 1968 (第2版 1970)

雑誌論文等

1937

「日本大名に送った羅馬教王の書翰調」『大分史談』1 (1937)、22-23頁

1938

「『古事記』と『神曲』に於ける原罪の問題」『宗教公論』第7年12月号 (1938)、2-7頁

1939

“Memorie cristiane della regione di Oita.” *Annali Lateranensi*, 3, 1939, pp. 9-59.

“E-fumi.” *Monumenta Nipponica*, 2-1, 1939, pp. 281-286.

“Akogi: Ballata in un atto di Seami Motokiyo.” *Monumenta Nipponica*, 2-2, 1939, pp. 551-572.

1940

“Okina, Il Vegliardo. La ballata più antica tra il No-gaku, la più sacra.” *Monumenta Nipponica*, 3-2, 1940, pp. 610-618.

1941

“Minase: Ballata No-gaku della scuola Kita-ryu.” *Monumenta Nipponica*, 4-2, 1941, pp. 585-599.

“Tracce di cristianesimo nei primordi della storia giapponese.” *Salesianum*, 3

(1941), pp. 278-286.

1942

「豊後切支丹の書簡に就て」『歴史地理』79-6 (1942)、52-57頁

1943

「白杵第十四、第十五代藩主に關する文献」『歴史地理』82-1 (1943)、32-37頁

1947

“Il primo martire.” *Gioventù Missionaria*, 1947, 11, pp. 4-7.

“La letteratura classica giapponese.” *Convivium*, anno XVI, 1947, pp. 523-530.

1948

“Dal Piccolo Veicolo al Grande Veicolo.” *Sapienza*, anno I, n. 1, 1948.

1949

“Saggio sui riti esoterici della setta buddista giapponese Shingon-shu.” *Annali Lateranensi*, 13, 1949, pp. 9-98.

1950

“Documenti sulla storia della Chiesa in Giappone, gli editti di persecuzione del 1619, testi e note critiche.” *Annali Lateranensi*, 14, 1950, pp. 9-59.

1951

“Il primo persecutore.” *Gioventù Missionaria*, 1951.

1954

「豊後大分郡津守村の五人組手形」『大分県地方史』3 (1954)、31-34頁

1956

“Le tombe cristiane di Bungo.” *Gioventù Missionaria*, 1956.

1961

“Oci-bo-sciu: quadri storici del Giappone.” *Annali Lateranensi*, 25, 1961, pp. 14-326.

1962

“The Kirishitan Rôyashiki.” *Japan Missionary Bulletin*, 16, 1962, pp. 104-111.

“The First Martyrs of Nagasaki.” *Japan Missionary Bulletin*, 16, 1962, pp. 306-312.

“The First Martyrs of Edo.” *Japan Missionary Bulletin*, 16, 1962, pp. 637-640.

“Pre-Xaverian Christians in Japan.” *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, no. VII, 1962, pp. 43-44.

1963

“The Kirishitan Yashiki.” *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, no. VIII, 1963, pp. 51-54.

1965

「最後のバテレン シドットティ」『カトリック生活』3 (1965)、9-13頁

1968

「修二会の行法と西アジア・原始キリスト教の儀式」入江泰吉『お水取り 入江泰吉作品集』東京 三彩社 (1968)

“The Oldest Buddhist Ceremonies in Japan: the Shu'nie 修二会 Ceremonies.”
Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan, no. XIII,
1968, pp. 102-104.

1970

「大分県大野郡緒方町字馬背畑の珍しい二重の洞窟について」『大分県地方史』
54-55 [大分県 (豊後・豊前) キリシタン特輯号] (1970)、67-72頁

1972

“The Nakatomi harai 中臣祓 and the remben 蓮弁 at the Tōdai-ji 東大寺 temple.”
Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan, no. XVI,
1972

註

- 1) 拙稿「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父 —マレガ文書群の成立過程とその背景—」(初出『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』12、2016年)、149-169頁。のち本書所収。
- 2) 田中裕介「豊後キリシタン遺跡の研究史・戦前編 —クルスバ・斗榭墓・十字架碑をめぐる民間研究者—」(『大分県地方史』227、2016年)、1-24頁。
- 3) ヴィンチェンツォ・チマッティ「日誌」1932年2月8日付には以下のような記述がある。「最初に日本に到着した記念日。会員仲間に歴史資料、日誌および画像資料などを集め布教地の歴史のことを気にかけるように勧めた。そのような研究は私はマレガ神父に委ねた」(“Data anniversario del nostro primo arrivo in Giappone. Raccomando ai confratelli di curare la storia della Missione raccogliendo materiale storico, cronaca e fotografico. Ho delegato D. Marega per studi del genere”). チマッティ日誌は調布市チマッティ資料館蔵 Alfonso Crevacore 編 “Venerabile Mons. Vincenzo Cimatti: la Cronaca” を指す。サレジオ会のクレヴァーコーレ神父がチマッティの手書きノート7冊などを基に、1982年に編集したタイプ原稿である。2014年にガエタノ・コンプリ神父により、電子媒体(ワードファイル)に収められたが、その際にコンプリ神父は所々にサレジオ会中央資料館で見つかった資料、もしくはそのような資料に基づいた情報を加えたという。この形のままで信頼度は高いが、あくまで二次資料であり、厳密な史料批判を要する。
- 4) Vincenzo Cimatti: *Breve cronistoria dei primi 25 anni di lavoro salesiano in Giappone* (Tokyo: Kankucho, 1951).

- 5) 同前 pp. 134-137.
- 6) Vincenzo Cimatti: *Nell'impero del Sol Levante* (Torino: Edizioni A. M. S., 1953).
- 7) “I missionari salesiani, oltre il lavoro diretto per la conversione delle anime, come utile sussidio per completare l'apostolato missionario tra le popolazioni loro affidate, cercarono anche di valorizzare doti ed abilità personali, specie nel campo degli studi religiosi, letterari, storici, scientifici e artistici, tanto più che il popolo giapponese ama, apprezza e assimila facilmente quanto gli si presenta come cultura, e stima assai le persone che ne sono dotate” (註6 Vincenzo Cimatti, p.239).
- 8) 前掲註6 Vincenzo Cimatti: *Nell'impero del Sol Levante*, pp. 241-242. 見出しのところにマレガは「Sac. Dott. Mario Marega」とされている。
- 9) 『古事記』のイタリア語訳以外、仮名手本忠臣蔵の翻訳と『伝説と物語に見る日本』がある。後者は翻訳本ともいえるが、民間伝承や神話伝説などが読みやすく書き直されている部分もある。その上、マレガ自身の日本印象記のような文章も集めている。
- 10) 註6 Cimatti, p.242. 「マレガ神父が出版するために準備している原稿は50本ぐらいある。テーマは多方面にわたる（仏教經典の翻訳、多種の詩歌、密教儀礼、能楽という古典演劇、日本の習俗等々）”Risalgono poi ad oltre una cinquantina i manoscritti che Don Marega ha per la stampa, su argomenti disparatissimi: (versioni di sutre, studi sul Buddismo, poesie di vario genere, riti esoterici, Nōgaku — teatro classico, — usi e costumi giapponesi, ecc)”.
- 11) 同類の肩書きはイタリアのラテルツァ社から上梓した他の2訳本にも見える。『伝説と物語に見る日本』(*Il Giappone nei racconti e nelle leggende*, Bari: Laterza, 1939)の表紙には布教団のことも言及されておらず、そこから判断すると聖職者であることはわからない（「マリオ・マレガ博士訳」“traduzione italiana del Dott. Mario Marega”）。ただし、同著の中表紙には『古事記』とほぼ同じ文言がある。『朝日新聞』の報道は1938年5月13日（東京）朝刊11頁に載っている。
- 12) マレツァについては、註1 ヴィータ論文参照。
- 13) 註4 Cimatti, p.137. マレガは「(その) 地方におけるキリシタン古記録の研究の完成のために (“per completare gli studi sulle antichità cristiane della regione”)」1948年から1950年まで大分に戻ったと述べる。
- 14) 1952年7月書簡。「サレジオ会員がイタリアから戻ったら、すべて整理が付き、私の大分地域殉教者の研究を最後までやれると願っています。日本語の本3冊目のためにすでにたくさんの資料を持っています。大分県に行ったらすぐにそれを終えるつもりです」(“appena i salesiani ritorneranno dall'Italia, spero che tutto si metterà a posto e che potrò finire i miei studi sui martiri della regione di Oita. Ho già un mucchio di materiale per un terzo libro in giapponese, che finirò appena mi troverò nella provincia di Oita”). サレジオ会員とは管区長などを指す。6年に1度トリノで開かれる総会 (Capitolo Generale) のために一時的に日本を離れていた。また、同年8月の書簡にも同じような心境を伝えている。「こちらの管区長が管区に帰ってきたら、私は、殉教者と大分の歴史について書こうとしていたところの本を完成させるよう、元の布教地に戻るができるかもしれない」(“quando il direttore di qui sarà ritornato in sede, allora può darsi che io potrò ritornare nella mia antica missione, per finire i libri che stavo scrivendo sui martiri e sulla storia di Oita”).

- 15) 元の布教地に戻ることなく、代わりに1953年に白杵へ派遣される。そして、1959年には再度東京に移る。ヴィータ註1論文および同論文の略年表を参照。
- 16) チマッティ資料館のガエターノ・コンプリ神父によれば、この1冊はもともと別府のサレジオ会の施設にあった。自ら、ローマに足を運んだ際、サレジオ大学図書館に持ち込んだものである。マレガ自筆の訂正や書き込みなども多く含んでいるので、マレガの『古事記』研究の観点から分析を要する。この蔵書印について筆者の「マレガ神父の日本文化研究」（郭南燕編著『キリシタンが拓いた日本語文学 一多言語多文化交流の淵源一』明石書店、2017年）、232-238頁も参照。
- 17) マレガが発案したこの図像をみると、彼より少し先立って在日していた『弓と禪』の著者、オイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel, 1884-1955）のことを思い出すにはいられない。
- 18) 『豊後切支丹史料』（別府 サレジオ会、1942年）、『続豊後切支丹史料』（東京 ドン・ボスコ社、1946年）。
- 19) 「豊後切支丹の書簡に就て」（『歴史地理』79-6、1942年）、52-57頁、「白杵第十四、第十五代藩主に關する文献」（『歴史地理』82-1、1943年）、32-37頁。
- 20) 「日本大名に送った羅馬教王の書翰調」（『大分史談』1、1937年）、22-23頁。
- 21) キリシタン大名などに宛てた書簡のバチカン所蔵日本関係文書で、イタリアの雑誌で紹介されたもののリストに過ぎない。どのような雑誌を指すか不明。『大分史談』の第2号及び第3号にも研究会などの報告が見え、マレガと史談グループの密接な関係を一層裏付ける。
- 22) 『大分県地方史』3号（1954年）、31-34頁。『続豊後切支丹史料』（419頁）の補足として享保期の「五人組規則」全文を紹介する。
- 23) 『大分県地方史』54-55号（1970年）、67-72頁。
- 24) これについては註2田中論文を参照。
- 25) “Memorie cristiane della regione di Oita”, *Annali Lateranensi*, 3, 1939, pp. 9-59.
- 26) 同前p.11.
- 27) “Parecchi registri sono ridotti in tale stato da non potersi più leggere: sarà nostra cura decifrare que’ pochi leggibili onde inviarne dettagliata relazione a Roma”, 註25 p.36.
- 28) “Documenti sulla storia della Chiesa in Giappone, gli editi di persecuzione del 1619, testi e note critiche”, *Annali Lateranensi*, 14, (1950), pp. 9-59.
- 29) “Saggio sui riti esoterici della setta giapponese Shingon-shu”, *Annali Lateranensi*, 13, 1949, pp. 9-98.
- 30) “Oci-bo-sciu: quadri storici del Giappone”, *Annali Lateranensi*, 25, 1961, pp. 14-326.
- 31) *Ko-gi-ki: vecchie cose scritte: libro base dello shintoismo giapponese* (Bari: Laterza, 1938).
- 32) 1935年12月4日付書簡。
- 33) *Il Ciuscingura, la vendetta dei 47 ronin: studio sui testi originali giapponesi* (Bari: Laterza, 1948).
- 34) *Il Giappone nei racconti e nelle leggende* (Bari: Laterza, 1939).
- 35) “Akogi: Ballata in un atto di Seami Motokiyo”, *Monumenta Nipponica*, 2-2 (1939), pp. 551-572; “Okina, il Vegliardo: La ballata più antica tra il No-gaku, la più sacra”, *Monumenta Nipponica*, 3-2 (1940), pp. 610-618; “Minase: Ballata No-gaku della scuola Kita-ryu”, *Monumenta Nipponica*, 4-2(1941), pp. 585-599.

- 36) 大分 ドン・ボスコ社、1933年（カトリック講話集25）。
- 37) 大分 ドン・ボスコ社、1933年（カトリック講話集28-29）、1934年（カトリック講話集36）。
- 38) 大分 ドン・ボスコ社、1934年。この一連の著作とドン・ボスコ社の出版活動については、Annibale Zambarbieri, “Per la comunicazione culturale: un’editrice e uno studioso italiano in Giappone”, *Atti del XXXIII convegno di studi sul Giappone, Milano, 24-26 settembre 2009*, a cura di Andrea Maurizi (Milano: AISTUGIA, 2010), pp. 351-364。
- 39) Lucia Ceci: *L’interesse superiore: il Vaticano e l’Italia di Mussolini* (Roma-Bari: Laterza, 2013), pp. 102-103が、イタリアと教皇庁の関係を背景に、1925年の聖年の事情を簡潔に紹介している。さらに、そこで引用されているG. M. Vian, “Gli anni santi di Pio XI” (F. Margiotta Broglio, ed: *La Storia dei Giubilei*, vol. 4, Giunti: Firenze, 2000, pp. 117-131) も参照されたい。
- 40) この「マレガ絵伝」について筆者は註16の「マレガ神父の日本文化研究」のなかですでに触れているが、詳しい紹介は今後の機会に譲る。
- 41) とくに Laurick Zerbini: “L’exposition Vaticane de 1925, l’affirmation de la politique missionnaire de Pie XI”, in Pettinaroli, Laura (ed.), *Le gouvernement pontifical sous Pie XI, pratiques romaines et gestion de l’universel* (Rome: École Française de Rome, 2013), pp. 649-671 および Erick Cakpor: “L’exposition missionnaire de 1925, une affirmation de la puissance de l’Eglise catholique”, *Revue des sciences religieuses* 87/1 (2013), pp. 41-59を参照されたい。前者は博覧会の画報および布教・民族学博物館所蔵の資料によることが多い。一方、後者は基本的に当時のカトリック系雑誌の記事を通して博覧会の意味について考察する。いずれも、先行研究の展望や資料論も含む、貴重な参考文献となる。
- 42) Supplemento 1, p.71.
- 43) Supplemento 1, p.66.
- 44) Supplemento 1, p.69.
- 45) Supplemento 3, p.177.
- 46) それぞれの展示室や会場の構成について註41 Laurick Zerbini論文 (pp. 654-657) が詳しい。
- 47) *Rivista illustrata dell’esposizione missionaria vaticana*, n. 26 (31 dicembre 1925), p.809 ff.
- 48) 調査の対象となる資料について註41 Laurick Zerbini論文 (pp. 650-651) に多くの示唆がある。
- 49) Supplemento 3, p.188. 周知のところであるが、重要文化財木造エラスムス立像は現在、東京国立博物館に寄託されている。重要文化財に指定される以前、1925年にその写真がエラスムス像としてバチカンに送られた事実は注目されたい。
- 50) “… [I missionari] concorrono ad accrescere il patrimonio scientifico del mondo”. *Rivista illustrata dell’esposizione missionaria vaticana*, n. 1 (15 dicembre 1924), p.6.
- 51) 註41 Laurick Zerbini論文, p.651.
- 52) イエズ会のタッキ・ヴェントゥーリ神父は同会の歴史家としてその業績はよく知られている。とくにマッテオ・リッチの研究などが早くも20世紀初頭に発表されている。しかし、1920年代からバチカンとイタリア政府との関係においてムッソリーニとの取次役としてのタッキ・ヴェントゥーリの外交的役割は見逃せない。彼の業績などについて Alessandro Saggiore: “Storico, testimonia e parte, Pietro Tacchi Venturi: storia, storiografia e storia delle religioni”, *Rendiconti Classe di Scienze Morali Storiche e Filologiche*, s. 9, vol. 13 (2002), pp. 451-489 およ

び“Pietro Tacchi-Venturi”, in Mario Mazza e Natale Spineto (eds.): *La storiografia storico-religiosa italiana tra la fine dell'800 e la seconda guerra mondiale* (Alessandria: Edizioni dell'Orso, 2014), pp. 165-171 参照。

- 53) ヴィルヘルム・シュミットは人物としての彼自身だけでなく、提唱している学説も博覧会の中心に据えられた。Supplemento n. 1には博覧会のために集められた資料はヴィルヘルム・シュミット神父の「新学説」を裏付けるに役立つと明言している。それは、彼の名著『神観念の起源』(*Der Ursprung der Gottesidee. Eine historisch-kritische und positive Studie*, 1912-1955)に著されるように、民俗学資料などに基づいた原始一神教である。伝記研究としてErnest Brandewie: *When Giants Walked The Earth: The Life and Times of Wilhelm Schmidt, SVD* (Freiburg, Schweiz: Univ. Verlag, 1990) が詳しい。バチカンとの関係についてAn Vandenbergh: “Entre mission et science: la recherche ethnologique du père Wilhelm Schmidt SVD et le Vatican (1900-1939)”, *Missions et sciences sociales* 19 (2006), pp. 15-36を参照。
- 54) 昭和13年9月25日付『カトリック新聞』は「伊訶古事記献上」という見出しをもって、「目下伊太利帰国中のチマッティ教区長はマレガ師に託された特製伊訶古事記とその原本、古訓古事記の木版三冊を教皇ピオ十一世陛下に献上した、陛下は自ら手にして永く観覧し給いマレガ師へ特別の祝福をお与えになり、また、この種文化事業に今後も努力するようにと仰せられ、もっとも御満足に御嘉納遊ばされた」と伝える（原文は旧体字）。
- 55) 註41 Erick Cakpo 論文参照。
- 56) バルセロナ布教博覧会についてLuis Ángel Sánchez Gómez “: Martirologio, etnología y espectáculo: la Exposición Misional Española de Barcelona (1929-1930)”, *Revista de Dialectología y Tradiciones Populares* 61-1 (2006), pp. 63-102 を参照。1926年のサレジオ会トリノ展は同会海外布教の50周年記念に行われた。その後、それもサレジオ会の布教博物館の母体となった。詳しい情報は同じ1926年の『サレジオ会年報』(*Bollettino Salesiano*) 5-6, 5-7に見られる。Maria Francesca Piredda: *Sguardi sull'altrove, cinema missionario e antropologia visuale* (Bologna: ArchetipoLibri, 2012), p.82も参照。
- 57) *Bollettino Salesiano* 72-9 (1948), p. 86。これは5月号であり、そのなかでパレルモの布教展の開会式は1947年12月30日に行われたと伝えられる。マレガはそのときにイタリアにいた。日本の宗教などについて講演もしたという。
- 58) これについてマレガの書簡やその他の資料などを整理する必要があるが、他の機会に譲る。マレガ・コレクションには「博物館のための物品」も含めていた（註1 ヴィータ論文〈本書所収分〉、註61参照）。大分においてマレガが中心となって2回ほど展覧会が企画された。イタリアファシスト党使節日本訪問（1938年）およびザビエルの日本入り400周年（1949年）のさいである（註4 Cimatti, p.137）。
- 59) これはヨーロッパ人による日本古書籍の使用形態の一つともいえる。19世紀にさかのぼるが、たとえばシーボルトが収集した和漢書籍も似たような機能を持たされていた。小山騰が指摘しているように、「それらの書籍（和漢古書）は認識・情報を伝達する手段として扱われたというよりも、どちらかといえば日本の事物そのもの、または視覚情報が含まれる入れ物（器）などとして使用された。西洋の書籍と形態や材料などで明らかに異なる和漢古書は、彼にとっては図書館の資料であると同時に、いわゆる博物館の資料にもなり得る存在であった」（小山騰『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み ―国学から日本学へ』 勉誠出

版、2017年)、24頁。